

選外佳作の一

河童の瓶

田中まり子

昔、河津川(伊豆ノ國河津庄)に、大變いたづらものゝ河童が住んでをりました。

或夏の日のことでした。一匹の可愛らしい小馬が、汗をぼくく流しながら疲れた様な様子を、川の側へミやつて來ましたが、そこに、おいしさうな、冷たい綺麗なお水をみつけるミ、さもおいしさうに、大喜びで息をもつかずゴクッくミ飲みはじめるのでした。まあそのお水のおいしいことゝ云つたらありません。唯、もう夢中で飲みつゞけるのでした。ところが不思議なことには、暫らくするミ川の中程に白い泡がブクくくミ盛れあがつてきたかと思ふミ、そのまに何やら、黒いものが河岸目指して一目散に泳いでくるのです。それは恰度頭の上へお皿でも載つけた様な、そして眼ばかりきよろしくさせた本當に妙な恰好をした河童でし

た。そして夢中で飲んでゐるお馬の脚もさめがけて、嚙りつくが早いか、よいしよくお水の中へ、引つ張り込まうとするのでした。この突然の出来事に、驚いたの何んのさ、もうあぶなく目をまはしてしまふところでした。さあ大變お馬は引つ張られまいとして一生懸命後足で踏んばりました。そこで兩方とも一生懸命引つ張りつこをしてをりましたが、お馬も死にもの狂ひですから仲々勝負がつかさうもありませんでした。暫らく夢中で引つ張りつこをしてをりましたが、その中段々お馬の方が弱つてきて何うやらあぶなくなつて参りました。それでお馬は何うにかして助かりたいものと思ひ、哀しさうな聲を振り搾つて、泣き叫びました。

ミころへ恰度この川へ村の腕白小僧さん達が今日もお水へ入らうとして、手に手をミつてやつて來たのです。ミころがこの有様なので、ワイ／＼云ひながら寄つてくるが早いか、皆で河童をつかまへて、ぎゅつ／＼のめに合せました。お馬の喜びは何んなだつたでせう。

大喜びで喜んで行つてしまひました。それから子供達は散々河童をいぢめた揚句、しまひには頭の上に載つかつてゐるお皿の水まで掬ひミつて喜ぶさうな有様でした。ミころが何うしたのか、あんなに元氣のよかつた河童が急に大人しくなつたかと思ふに、動けなくなつてしまひましたので、子供達は不思議に思ふのでした。それもその筈です。河童にミつて何よりも大切なお皿の水をさられてしまつたのですもの、さすがの河童も涙を流して謝りました。けれど

子供達は益々面白がつて囃したてるばかりで逆も助けてくれさうにもありませんので、河童も今は途方にくれてぼんやりして懐しい水の中のお家のこころなき思ひ出し、哀しみに打沈んでをります。こころへ通りかゝつたのが栖足寺せいそくじの和尚さん、この和尚さん云ふのが又大變情深いよい方でしたから、村の人達誰もが、この和尚さんの云ふ事なら、何んなこころでも喜んでさく云ふ有様でした。元々憐れみ深い和尚さんのこころです。之を見て黙つてゐる筈はありません。さすがの子供達も和尚さんに懇々云ひ含められて、大人しく歸つて行くのでした。

河童はそんなに嬉れしく有難かつた事でせう。やがて和尚さんは河童に向ひ靜かに云ひきかせるのでした。「なう河童や、之から二度こあんな真似をしてはならないよ。他を困らせる様なこころをすれば、自分も困る。時が来るのだよ、わかつたかね」云ひます。河童はホロ／＼涙を流しながらコックリ／＼肯くのでした。さうして本當に自分の惡かつたこころを謝り、之から二度惡いこころはしない誓ひましたので、和尚さんもすつかり喜んで、ニコ／＼しながら元通りに頭の上のお皿にお水を入れてやります。河童は大喜びで、叮嚀にお禮を云つて、嬉れさうに河の中へ歸つて行きました。

その晩のこころです、夜も大分更けた頃に和尚さん／＼自分を呼ぶ聲にハッとして目を醒してあたりをみまはします。何うでせう、枕元のこころに妙な恰好をしたものが立つてゐるの

です。よくく見るにそれは河童でした。一體今時分何しに來たのだらうと不思議に思つてをりますと、「和尚さん、さぞびつくりなすつたでせう、私は晝間助けて頂いた河童で御座います。この御恩はいつまでも忘れません、ついではお禮に之なる瓶を置いてまゐりますと云つて黒い大きな瓶を置いたまゝ行つてしまひました。

和尚さんは呆氣にさられたまゝぼんやりとしてをりましたが、暫らくして夢から醒めた様に、自分に返り、よくく枕元を見直しますとちやんこ枕元に黒い瓶(瀬戸黒の)がをいてありました。

それから云ふもの和尚さんは、この瓶をお寺の寶物として大事にくいたしました。

今でもこの瓶は栖足寺(せいそくじ)の寶物として傳はつてゐるさうです。そして不思議なことには、この瓶の口に耳をあてゝみますと、川の流れの音がサラ／＼／＼ときこえてくること云ふことです。